



【地区福祉委員会活動】vol.3

## 見守りがつなぐ地域の輪

～「元気で長生き」を実現する福祉委員活動～

たかいしし こうよう こうく ふくし いいんかい  
高石市 高陽校区福祉委員会

高陽校区福祉委員会は、高陽小学校の一室を拠点に「元気で長生き」をモットーに56人の委員と約150人の協力者で活動を行っています。複数の部会がそれぞれの役割を担う「部会制」を取り入れ、地域福祉活動部、個別支援活動部、健康推進部、青少年部、営繕部の五つの部会がそれぞれの得意分野を生かしながら活動しています。今回は、その中でも見守り活動に焦点を当て、高陽校区福祉委員会の魅力や取り組みの背景を紹介します。

訪問を心待ちに  
―個別支援活動部の見守り訪問―

同委員会の中で、主にひとり暮らし高齢者の見守り活動を担っている部会が個別支援活動部です。

見守り訪問では、地区ごとに担当者を分け、毎月約370人の75歳以上のひとり暮らし高齢者、障がい者を対象に、安否確認や声かけを行っています。

訪問時に、1月・2月はカイク、3月はマスクなどの季節の生活用品を添えて「元気にしてる?」「変わったことない?」と声をかけてまいります。

訪問を心待ちにしている方も多く、委員が顔を見せることで安心されたり、多くの方から「元気が出ました」といわれたりすることもあります。

福祉委員の太田喜久子さんは訪問活動を続ける中で、「支えられているのは見守り対象者だけではなく、こちらも同じなんです」と話します。定期的な顔を出すようになってからは、毎月の

決まった日に行かないと、福祉委員が見守り対象者から心配されることもあります。

また、同じく福祉委員の橋本律子さんは、「遠くの親戚よりも近くのご近所に頼っていたら、日ごろからの交流を大切にしています」と語ります。ささいな声かけの積み重ねが、地域生活の安心とつながりを育んでいます。

見守り活動と社協が連携  
できる仕組み―見守り登録カード―

見守りの際に大きな役割を果たしているのが、「見守り登録カード」です。見守りをする必要とする人は、このカードに住所や電話番号、緊急連絡先などを記入します。記入されたカードは高石市社協で一元管理されており、地域の見守り活動と社協が連携する仕組みになっています。

委員が訪問した際、「新聞が数日分たまっているなど、気になる点があれば



見守り訪問のようす

ばすぐに社協へ連絡します。いつも家にいる時間に呼び鈴を鳴らしても反応がないため、窓から室内を覗くと倒れているのを発見、救急搬送をしたこともあります。

ある地区では、見守り登録カードとは別に、地区独自の見守りカードを作成しています。これは、社協が対応できない夜間や土日でも迅速に対応できるようにしているもので、隙間のない見守り支援体制が整っています。

学校との密な連携が生む  
安心・安全 ―下校時の見守り活動―

高陽校区では、学校の一室を地域の拠点として使用しています。学校と密な連携や顔が見える関係を構築しており、その窓口となるのが青少年部です。

青少年部では、週2回下校見守りを実施しています。さらに、毎年4月には新1年生を対象に、入学式の翌日から2週間、学校の門から自宅までつき添って帰る取り組みも行っています。

新1年生が一人で帰ることに慣れるまでのサポートであり、安全な帰り道を覚えてもらう意味もあります。4つの班に分かれて、必ず家の前まで送り届けるため、保護者や先生からも感謝されている活動です。

活動前には、学校の先生と情報を共有し、担当する児童の安全な帰宅ルートを事前に確認。当日は危険な場所や気をつけるポイントを伝えながらそのルートを一緒に帰ります。

こうした日々の関わりが積み重なり、毎年学校では「ありがとう集会」が



「元気で長生き」を掲げる立石委員長

高陽校区では、毎月五役会（執行委員会）を開催しています。五役会には社協の地域支援系の職員が参加し、定期的に情報を共有する場となっています。お互いの動きが見えているので、見守り活動の中で気になることがあれば、すぐに社協と連携できる関係が自然とできています。立石昭次委員長は「この関係が一番大きい」と語ります。

高陽校区福祉委員×社協  
安心して過ごせる地区へ

社協との信頼関係があることで、地域で活動する委員たちも安心して動くことができ、結果的に住民への支援も円滑に進みます。高陽校区と社協の連携は、見守りをはじめとした地域福祉活動を支える大きな力となっています。

## 全員野球で行う地域活動

現在の部会体制を整えたのは立石委員長でした。「校区福祉委員会は委員長ひとりで進めるものではありません。全員野球で一致団結し、それぞれが責任をもって執行していくことが大事だと考えています」と話します。この考えのもと、校区福祉委員が一丸となり、

日々の地域活動に取り組んでいます。

高陽校区福祉委員会のモットーは「元気で長生き」。活動を続けることで、地域の方々を支えるだけでなく、委員自身の健康づくりにもつながっています。「楽しませるだけではなく、自分たちも一緒に楽しむことを大切にしています。活動を続けることで、こちらが力をもらうことも多いんです」と立石委員長は笑顔で語ります。

高石市社会福祉協議会職員から  
高陽校区福祉委員さんに一言!!

井上さん：普段の活動に本当に感謝しかありません。これからも一緒に「元気で長生き」な活動を続けていきましょう。

門田さん：普段から気にかけてお声かけいただき、社協職員も委員さんからたくさんパワーをもらっています。いつもありがとうございます。

太田さん：僕らの教科書のような委員活動を行っている高陽校区の委員さんには本当に感謝しています。これからも力を合わせて高石市をいい場所にしましょう。



高陽校区福祉委員と高石市社協職員のみなさん





# 「私にもできる」という支援 ～地域支援活動を通して繋がった新しい役割～

日常生活自立支援事業(以下、日自事業)は、認知症高齢者や知的障がい者、精神障がい者など判断能力が不十分の方が地域で自立した生活を送れるように支援する制度です。この事業は、利用者と契約を結び、福祉サービス利用援助や日常金銭管理などを行います。

利用者が安心して生活を維持するだけでなく、地域とのつながりや社会参加への一歩を後押しする大切な役割を担っています。今回は、大東市で支援を受けながら地域で新しい居場所と役割を見つけた方と、その方々を支える専門員の活動を紹介します。



上島 久典さん

上島久典さんには、発達障がいの特性があります。約2年前に日自事業を契約しました。

契約する前の生活を振り返り、「給与をもらっても全部使ってしまう、自分で金銭管理する自信はなかった」と上島さんは話します。

大東市社協(以下、市社協)の専門員、宮本健一さんと辻本奈央さんも「契約開始してすぐの頃は、支援計画で決めていたお金をすぐに使ってしまう、毎日のようにお金を引き出してほしいと依頼があった」と当時を振り返ります。

しかし、日自事業を契約後、現在の就労先に勤めるようになり、ボランティア活動に取り組みようになってから、少しずつお金の使い方や生活習慣が改善されました。

現在も、上島さんは市社協を訪れ、生活費などを受け取っています。「今も自分で管理できる自信はないですが、これから自分も、もうちょっと頑張らなかなあ」と上島さんは話します。

## 「私にもできた」という経験が次の活動に

現在、上島さんは働きながら、市社協が実施する地域の活動拠点「RiBBON」でボランティア活動



市社協 辻本奈央さん(左)、上島久典さん(中)、市社協 宮本健一さん(右)

わるようになったことがきっかけで、日頃の情報交換が活発になったそうです。上島さんが大切にしている「みんなとの会話」が、市社協の職員同士で話すきっかけにも自然とつながっています。

## 支えることができるように

市社協では年々、日自事業の利用者数が増えています。これからさらに増える利用者をつかり支えることができるように、自分たちのスキルアップも必要だと宮本さんと辻本さんは意気込みます。

しています。

はじめは、本人の希望で、RiBBONの畑の手入れや水やりやにチャレンジしていました。水をあげすぎて苗を枯らすなど、上手くいかないことも多くありました。それでも、市社協RiBBON担当に助言をもらいながら、諦めずに野菜や果物を育て、収穫にいたりしました。「私にもできた」という経験がきっかけになり、他の活動にも関わるようになりしました。

月1回のRiBBONでのフードバンク活動では、市社協に寄贈された食料品などを生活に困窮された方などに渡しています。上島さんは、来られた方に食料品を渡したり、仕分け作業をしたりする役割を担っています。

## 「助かっている」の聲がやりがい

「みんなとの会話を大切にしている」という上島さん。フードバンク活動に参加された方に「コーヒーを提供し、積極的に話しかけています。」

「ここにきて楽しんでもらえるようにしたい」という思いが活力になり、活動を続けています。参加者から「助かっている」といわれることが上島さんのやりがいにつながっています。



RiBBONの畑でサツマイモを収穫

## 頼もしい存在に

上島さんには、その日の出来事や不安に思ったことなどを社協に立ち寄り、話して帰るというルーティンがあります。はじめは、30分以上話していましたが、RiBBONでの活動に参加して

RiBBON

住民の孤独、孤立防止や居場所づくり、参加支援をめざしています。令和5年4月に開始し、現在、市内2カ所で地域住民が気軽に集える居場所として、開放されています。フードバンクや収穫祭など、RiBBONを知り訪れたくなるようなイベントも定期的に実施しています。

## 地域で活躍する

## 民生委員・児童委員さん

(NO.51)



東大阪市  
民生委員  
石谷 美佐子さん  
(民生委員歴10年)

このコラムは、地域で活躍する民生委員・児童委員(以下、民生委員)さんにスポットを当て、その方の思いを紹介します。今回は、笑顔とていねいな対応をモットーに、地域のつながりを大切にされる石谷さんにインタビュー。活動で大切にしていること、今後の抱負について聞きました。

## ●自治会の経験から民生委員へ

以前、自治会の役員を務めており、地域の見守りネットワークの中で高齢者と関わる機会が多くありました。民生委員は、住民と社会の橋渡しをする存在だと知っていたので、深く考えずに民生委員を引き受けました。自治会での知識や経験も生かしながら、地域のつながりを大切に活動しています。

## ●笑顔とていねいな対応で安心感を

初対面の高齢者は、詐欺などから身を守るために警戒心が強く、不信感をもたれることもあります。そこで、まずは相手に安心してもらえるよう、笑顔とていねいな対応を心がけています。現在80名ほどを担当

## Q 質問数珠つなぎ

Vol.50 黒川さんから質問  
人口の多い地域ではどのように地域と関わっているのか?

## A 石谷さんの回答

日中は、広報紙や名刺のポスティング、周囲との情報共有。夜には歩いて、電気やテレビの音を確認するなど、顔の見えない見守りも実施しています。